

縄文人の生と死

－ 女性・子ども・老人 －

国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学

山田 康弘

1: 墓の認定方法

人骨出土例による基準の作成→埋葬施設・土坑の規模や形状・埋葬姿勢等の属性の詳細な検討が必要。

- ・遺構内から人骨が出土したもの。ないしはその痕跡が検出されたもの。
- ・人骨出土例と比較して、土坑の規模や形状が墓として適当なもの。

など。まずは、わかりやすい事例を詳細に検討し、その成果を敷衍して行く方向性が大切だろう。

2: 墓からどのようなことがわかるか

- ・墓の形・構造はどのようなものであったのか。
- ・墓のつくられた場所、位置関係はどうか。
- ・どのような埋葬方法がとられていたのか。
- ・どのような副葬品が供えられていたか。
- ・人骨が遺存していた場合、その年齢・性別・習慣・既往症・死因などはどうか。

→これらの諸点を総合しながら、昔の人々の生活を復元していくことになる。

3: 縄文人の特徴

- ・顔高が低く、丸顔・エラが張っている。
- ・彫りが深く、鼻が高い。しかめ面。
- ・眼窩が四角で、やや目尻が下がる。眉上弓は直線的。
- ・身長は成人男性で 158 センチ程。
- ・かつては手足が長く南方的といわれていた。最近の研究では「胴長短足」であり、北方的な形質とされる。

4: 縄文時代のある女性の一生

- ・縄文時代の妊産婦の埋葬例→縄文人骨 14,000 体に対して 13 例程度確認されている。
- ・イヌを顔面におくなど、他とは異なった埋葬方法が採られる。→妊産婦の死を特別扱いしている。

○宮城県前浜貝塚における妊産婦の埋葬例

- ・17 歳くらいのきゃしゃな女性。
- ・結婚してからさほど時間がたつてはならず、妊娠を経験していた可能性のあること。
- ・年齢などからみて、おそらく初産であろう。
- ・新生児の墓に接して埋葬されていたことから出産時の事故によって亡くなった可能性が高い。

○母体としての土器

- ・土器を女性の身体になぞらえる民族（民俗）事例は東アジアを中心として世界中で見られる。
- ・再生観念・循環の思想に基づくもの。

○妊娠・出産とイヌの親和性

- ・民俗学的に妊娠・出産とイヌは非常に関係が深い。→イヌと子供に関する習俗が、縄文時代にまでさかのぼる可能性がある

○前浜貝塚におけるある女性の一生

15 歳ころに成人式を迎え、上顎左右犬歯を抜歯する。その後すぐに結婚し、新婚一年弱で懐妊。

しかしながら、出産時の事故等により死亡。子供も死亡してしまった。享年 17 歳。死後に、周りの人々が頭部に子供の土器棺墓を、顔面にイヌを置くという特別な葬法で再生を願い、埋葬を行った。

5：縄文時代の子供たち

○縄文時代の成人式（通過儀礼）

- ・抜歯の風習が手がかりとなる。

○子供の年齢段階

- ・新生児期（胎児・死産児等を含む）
- ・乳児期（概ね 5・6 ヶ月から 2 歳未満まで、離乳まで？）
- ・幼児期（概ね 2～5 歳位、乳歯の萌出未完了）
- ・小児期（概ね 6～12 歳位、永久歯の萌出開始）
- ・思春期（概ね 13～16 歳位まで）

○新生児期段階

- ・土器棺墓の事例が多い。

○乳児期段階

- ・出土人骨に観察できるエナメル質減形成の存在。→離乳が 2 歳頃に行なわれた証拠。
- ・合葬例は必ず女性とペアになる。

○幼児期段階

- ・複葬例が増加し、基本的には大人と変わらない扱いをされるようになる。→集落構成員としての認知。
- ・男性との合葬例が多くなる。→ジェンダー教育の開始。

○縄文時代の子供のライフヒストリー

新生児期

- ・死産児は土坑墓へ、わずかな期間でも生きていた子は再生を祈願されて土器棺に埋葬された。

乳児期

- ・無事に成長した子は 2 歳頃に離乳し、母親を離れて行動するようになる。

幼児期

- ・集団生活にも参加し、集落構成員として認知されるようになる。
- ・この頃から、玉類や腕飾などの装身具を着装するようになる。
- ・男の子は大人の男性と、女の子は大人の女性と行動をともにすることが多くなり、労働力としても期待されるようになっていく。

小児期・思春期

- ・異常死した子供は特別な埋葬方法で葬られた。
- ・成長するまでに、中毒や事故などによって血縁関係者と一緒に死亡した場合は一緒に埋葬された。
- ・12～16歳頃に成人儀礼が行なわれ、通過儀礼の一環として抜歯などの身体変工が行なわれた。

青年期

- ・結婚
- ・女性は妊娠し出産を迎えるが、出産時に死亡した者は他者とは異なった埋葬方法がとられた。

壮年・熟年期

・成人儀礼以降には、社会的経験の有無、加齢、性別、地位、出自などに基づいて、装身具の着装や身体変工が行なわれた。

老年期

- ・隠居・退役があった可能性がある。

6：縄文時代の家族像

○墓からみる当時の家族像

- ・埋葬小群中には遺伝的な関係持つ人々が埋葬されている。
- ・埋葬小群の規模からみて、おそらくは三世代程度の拡大家族が単位となっていた可能性が高い。
- ・住居のサイズからみて、おそらくは核家族が中心となって一住居に居住していただろう。
- ・一集落内に数世代の血縁関係者が存在していた。
- ・縄文時代の家族像は、おそらく2～3世代が近接して居住する拡大家族のようなものであろう。

7：縄文時代の死生観

○多数合葬墓とは？

・血縁関係者同士の墓をいったん棄却し、異なる血縁の人々と同じ墓に再埋葬したもの。生前の関係性を撤廃し、新規に関係性を再構築するために行われた。→民族誌にみる「寄せ墓」と類似。

- ・「寄せ墓」の機能→集団内の紐帯の強化→祖霊祭祀の登場へ

○縄文時代における祖霊崇拜

- ・自分たちがどのような系譜的な位置にあるのかを知る必要がある。
- 自己の歴史的俯瞰。時間的変遷の中に自分を置く。(先祖代々のつながりを考える)
- ・大規模な配石遺構などが、複数の血縁集団を統合するための装置として機能する。
 - ・生者による死者の利用が行われた。

○縄文時代における二つの死生観

- ・再生・循環の死生観→自分自身が姿形を変化させながら自然の中を循環していくという死生観。
- ・系譜的の死生観→自身が「先祖」になるという形でバトンリレーのように命をつないでいくという死生観。

参考文献

- 山田康弘 2008 『生と死の考古学』 東洋書店
山田康弘 2014 『老人と子供の考古学』 吉川弘文館
山田康弘 2015 『つくられた縄文時代』 新潮社

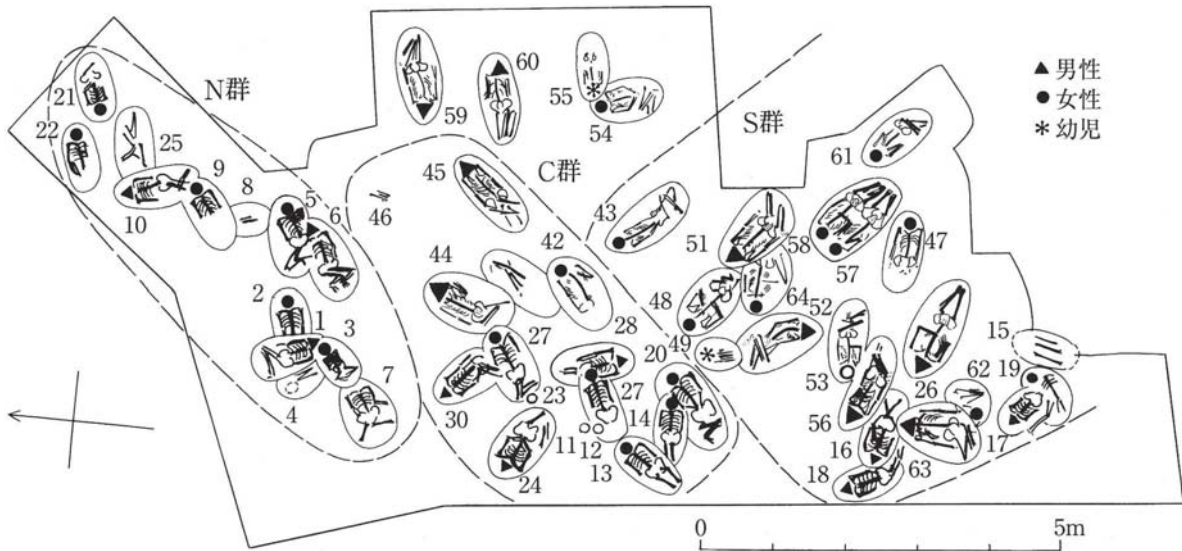


図1 岩手県蝦島（貝島）貝塚における人骨出土状況

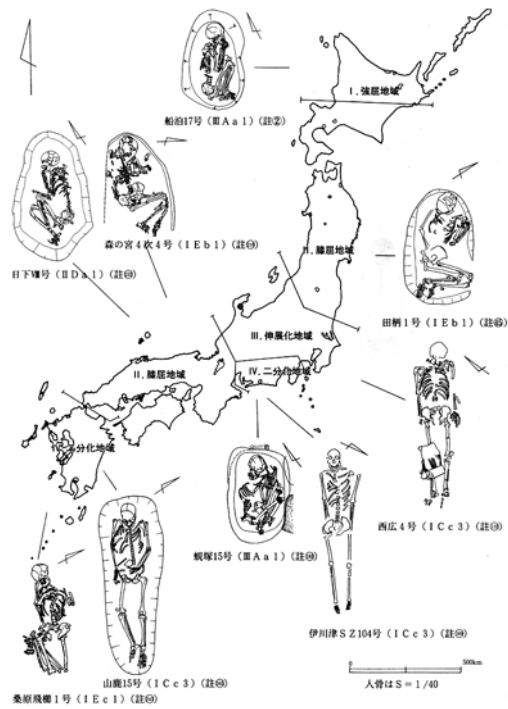
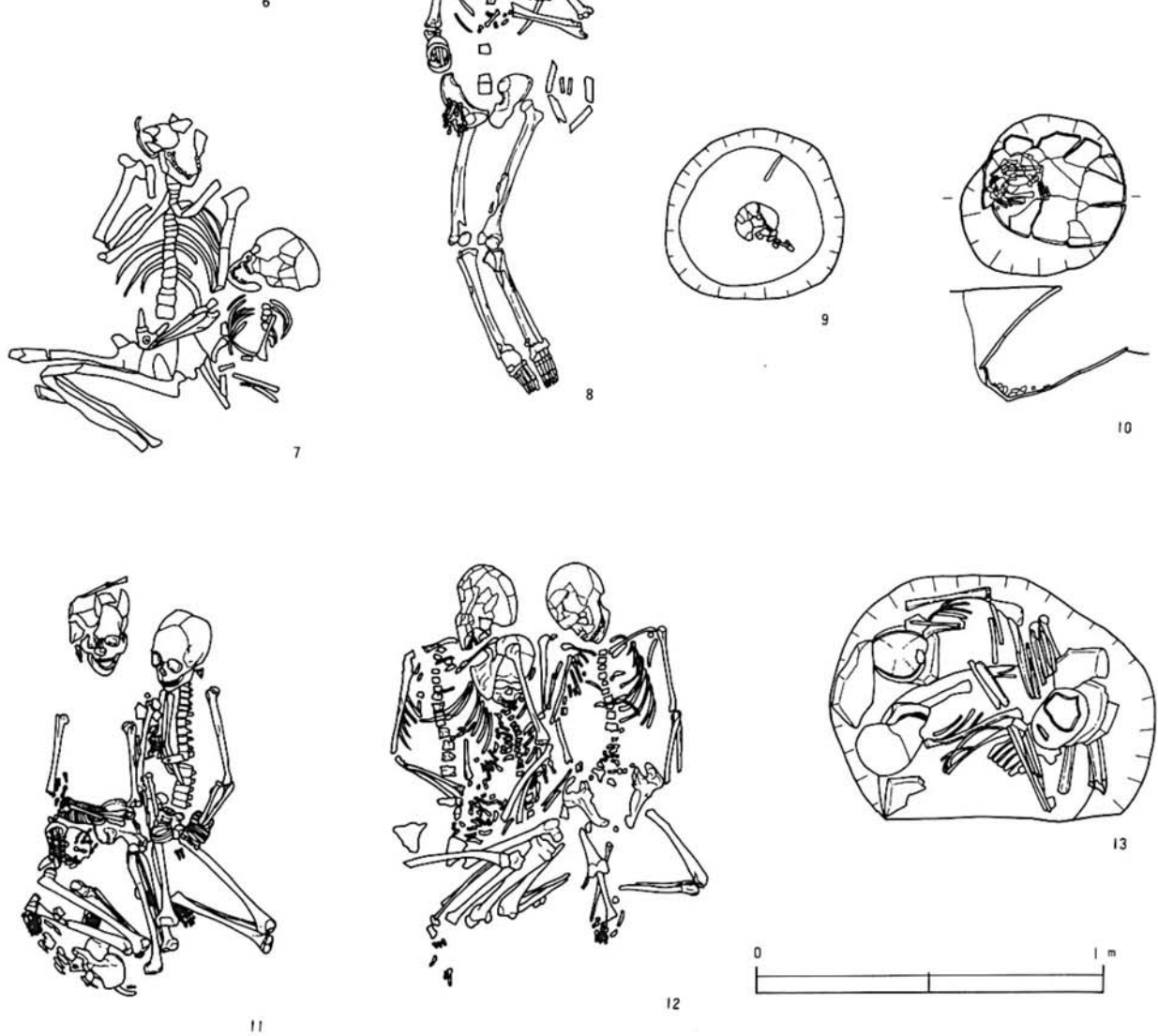


図2 縄文時代各地における埋葬姿勢のあり方



図3 宮城県前浜貝塚における妊産婦の埋葬例



- 1 : I A a 田柄貝塚 S 9 号人骨 (新生児期) 2 : I A a 里浜貝塚出土人骨 (新生児期) 3 : I A a 権現原貝塚 5 号人骨 (幼児期)
 4 : I A a 貝の花貝塚 28 号人骨 (幼児期) 5 : I A a 薄磯貝塚出土人骨 (小児期) 6 : I B a 3 田柄貝塚 S 6・7 号人骨 (新生児期)
 7 : I B a 1 草刈貝塚 202 住居跡 A・B 人骨 (幼児期) 8 : I B a 2 山鹿貝塚 5・6 号人骨 (幼児期) 9 : I A b 伊川津貝塚 7 号人骨 (乳児期)
 10 : II 田柄貝塚 S 6 号人骨 11 : I C a 山鹿貝塚 2・3・4 号人骨 (乳児期) 12 : I C a 枯木宮貝塚出土 2・3・4 号人骨 (小児期)
 13 : I C b 二日市洞穴 3 号土壇 1・2 a・2 b・3・4 号人骨 (幼児期)

図 4 各地における子供の埋葬例





※矢印線の太さは頻度を表す